

「ために生きる」

皆さん、こんにちは。

今日は「ために生きる」という題目で、説教を致します。

はじめに、聖書を拝読します。

ひとりの律法学者がきて、彼らが互に論じ合っているのを聞き、またイエスが巧みに答えられたのを認めて、イエスに質問した、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」。

イエスは答えられた、「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。

心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。

（『新約聖書』マルコによる福音書 第12章 第28～31節）

「為に生きる」が真の父母様の根本的ご指導

真の父母様は、人生に渡って「為に生きる」ことの大切さを強調して来られました。真の父母様の生涯を見てみると、その人生そのものが正に「為に生きる」人生だったということが分かります。

真の父母様はその実体で「為に生きる」人生を私達に教えてくださっています。

今日は、「為に生きる」ことについて、真の父母様のみ言を紹介しながら、そのポイントをお話したいと思います。

「為に生きる」ことについて、お父様はそれが「宇宙本源の原則」だと教えていらっしゃいます。そのみ言を紹介します。

個人は家庭のために、家庭は氏族のために、民族は国家のために、国家は世界のために…。世界を一つにするという、世界のために生きるという、そういう男、女にならなければ、宇宙の主体である神様の子供になれません。自国のみを愛する者は、神様の子女になれません。

このような原則を一言で言えば、「ために存在する」であり、これが宇宙本源の原則であり、理想の基盤です。

（『平和の道 文鮮明師◆真の愛の軌跡』p.30 1974年5月7日、東京・帝国ホテル、「希望の日」晩餐会）

「為に生きる」時の 2 つのポイント

「為に生きる」と言う時、まずその言葉から読み取らなければならない 2 つのポイントがあります。

1 つは、「為に生きる」にも、誰の、何の為に生きるのか、という対象が必要だということです。自分一人だけで「為に生きるぞー！」と決意して言っている、何にもなりません。

「為に生きる」時には、具体的に為に生きる対象を思い浮かべ、その対象が何を求めている、何をしてあげたら喜び幸せになるのかをイメージしなければなりません。

例えば、学校で為に生きようと思う時、その対象は何なのかをイメージしなければなりません。それが友達なのか、または先生なのか、その対象によって為に生きる具体的な行動は変わってきます。

友達の為に生きようと思えば、その友達に対して自分が何を与えることができれば友達の生活や人生が喜びになるのかを考えましょう。英語が苦手な友達なら、一緒に英語を勉強してあげるのも良いでしょう。掃除を真面目にできない友達なら、掃除と一緒に頑張るあげるのも良いでしょう。

先生の為に生きようと思えば、先生が願っていることは何かを考えなければなりません。授業の雰囲気良くしたいと先生が思っていれば、そのために授業中の態度や返事を良くしようということになるでしょう。生徒の成績を上げたいと先生が思っていれば、まず自分が勉強を率先して頑張り、皆が勉強する雰囲気をつくっていくことが大切でしょう。

このように、「為に生きる」ようになりたいと思う時、その環境で誰のために、何のために生きるのかをイメージすることが大切です。

2 つ目は、「為に生きる」ことは、先程のお父様のみ言にもあるように「為に存在する」ということです。

「為に生きる」ことは一時的なことではいけません。一度為に生きると決めたら、ずっと変わらずその対象のためにあり続けることが大切です。その時間は自分のためにやってくれたのに、一定の時間が過ぎたらそうしてくれなくなったというのでは、信頼されることができず本当に為に生きたことにはなりません。それは自己満足になってしまう場合があります。つまり、「為に生きる」ことには「永遠性」が伴うのです。「為に生きる」時には、「その対象のために自分が存在するのだ」と思って、変わらずに為に生きていくことが大切です。

より全体の為に生きる

次の「為に生きる」ことについてのみ言を紹介します。

ですから、ここで知らなければならないことは、自分を中心にして作用しようとすれば悪をもたらすのですが、全体のために作用しようとすれば発展をもたらすということです。これが分からなければなりません。全体のために行く時には、あらゆるものが門を開くということです。個人も門を開き、家庭も門を開き、氏族も門を開き、民族も門を開き、世界

も門を開き、天国も門を開き、愛の道など、あらゆる道が門を開き歓迎するのです。

（『真なる子女の道』 p.31）

「為に生きる」において、対象が大切なのですが、その対象はより全体の為に生きることが大切だと教えていらっしやいます。

もちろん自分を大切にすることは大切ですが、それだけで終わってしまえば、自己中心的な人になってしまいます。

「為に生きる」時、基本的な考え方は、より全体を意識することです。つまり、自分よりも他者、個人以上に家庭のために、家庭以上に氏族（親族）のために、氏族以上に民族のために、民族以上に世界のために、です。

成和学生の皆さんの生活環境で考えれば、家にいる時には、自分のこと以上に家族のことを考えることが為に生きることでしょう。家事の手伝いや家族の相談を聞いたりして、どうしたら家族が平和に生活することができるかを考える人が、家庭で為に生きる人になります。

学校にいる時には、自分のこと以上に友達のことや先生のこと、またクラス全体や自分の所属する部活全体のこと、更には学校全体のことを考えることが、為に生きることであり、そのような人が学校で誰よりも為に生きる人になります。

教会では、自分のこと以上に兄弟姉妹のことや学生部長のことを考えて、どうすれば皆が喜ぶ礼拝や学生会活動になることができるかを考えることが為に生きることであり、そのような人が教会の兄弟姉妹で誰よりも為に生きる人になります。また、家庭連合全体がどうしてもっと社会や世界のためになる存在になれるかを考える人が、教会全体の為に生きる人になるでしょう。

正に真の父母様は、自分のことを一切おいて、誰よりも世界のために生きて来られた人生でした。だからこそ、人類の真の父母となるのです。

そして、「為に生きる」対象が、世界以上に大きなものがあります。それが神様です。神様の為に生きる人が、世界中の誰よりも為に生きる人になるのです。

「為に生きる」人が中心者になる

それでは、次の「為に生きる」ことについてのみ言を紹介します。

ですから、より為に生きなければなりません。では、より為に生きるということとはどういうことなのでしょう？より為に生きる人が責任者になるのです。十人のうち、誰が中心になるかといえ、その十人のために、愛し、生きた人です。その人の所には十人が十人皆、訪ねてくるのです。そうでしょう？そうですか、そうではありませんか？今までは、為に生きることは悪いことだと思っていたのですが、これからは、為に生きることで中心者になり、責任者になるということを知らなければなりません。主人が中心者になるということを知らなければなりません。

（『真なる子女の道』 p.33）

真の父母様は、「為に生きる」が、その環境で中心者になると教えていらっしやいます。より全体の為に生きる人は、「この人は私達のために頑張ってくれる人だ」と、皆から信頼されるからです。

特に「為に生きる」ことの真価が問われるのが、皆が限界状態の時です。皆が疲れていたり、面倒くさかったりしている時は、自分以外の他者のためにやってあげたいという気持ちが弱くなります。それよりは、自分が休みたいという気持ちが強いからです。

家族で出かけ先から帰って来て疲れている時や、学校で体育の授業の後や部活動の練習の後などが、そんな場面になるでしょう。

でもそんな時こそ、心と体の限界を一步超えて皆の為に生きることができれば、「こんな状況でもこの人は私達のためにやってくれる」と、更に信頼を勝ち取ることができるようになります。

お父様が正にそのような方でした。無実の罪で監獄生活をしなければならなかった時、誰も嫌がる仕事を率先してされたし、誰もが嫌がるトイレの一番近くで休みました。そうして、その実体で信頼を勝ち取り、「ファーザームーン」と慕われるようになったのです。

成和学生の皆さんも、皆が極限状態の時に、一步踏み出して為に生きてみてください。

家族で帰って来た時、誰よりも率先して荷物を運び家の電気を付けていきましょう。クラスメートや部活仲間が疲れている時、誰よりも率先して片づけをしたり声をかけたりしていきましょう。

そうすれば、皆さんは必ず信頼を勝ち取る中心者になります。

更なる「為に生きる」は、その人の愛するものを愛すること

それでは、今日最後のみ言を紹介します。

父母の愛を受けようとするには、何をすればよいのでしょうか？父母が愛するすべてのものを愛さなければなりません。そうすれば、愛を受けられるのです。それを知らなければなりません。家庭でいえば、父母からの愛を受けようと願うならば、その息子娘は、父母が持っているあらゆるものを愛して、父母の愛を受けなければならないというのです。それをしないで、愛を受けようとする人は泥棒です。

（中略）

ですから、神様の愛を受けようとすれば、どうしなければなりませんか？神様の愛を受けようとするにおいても同様です。

（『真なる子女の道』 p.39）

「為に生きる」ことは、その対象が愛するものを一緒に愛することだと教えていらっしやいます。

つまり、その人だけを見て何かをしてあげようとするのではなくて、その人が見ているものを一緒に見て、一緒にその願いを果たそうとすることです。

実は、為に生きられる側の立場から見ると、自分のために何かをしてくれる以上に、自分が願っていることを一緒に実現してくれる方が、何倍も嬉しいことなのです。

例えば家庭では、父母が願っていることは何でしょうか？父母は基本的に子供達が仲が良く、一人ひとりがよく成長してほしいと願っています。親の肩たたきをすることも、もちろん親の為に生きることですが、それ以上に、兄弟が仲良くすること、自分や兄弟がよく成長することを願っていて、そのように行動してくれた時、親は喜ぶのです。

より大きな全体のために、という視点で見るとどうでしょうか？一番は神様の為に生きることだとお伝えしました。それでは神様が願っていることとは何でしょうか？

神様は人類の親ですから、世界中の人類が兄弟姉妹として仲良くなり、人類が神様の子女として立派に成長してくれることを願っています。

そのために、本当の親が分からなくなってしまった人類に、神様と真の父母様を伝え、一つにしていくことが、何よりも神様の為に生きることになるのです。

そのように、その人の願いを共に果たそうとする人が、誰よりも信頼を勝ち取り、その人からの愛を受けるようになります。

成和学生の皆さん、家庭で、学校で、教会で、そして生活の中で、より全体のために、誰よりも為に生きる人を目指して、頑張っていきましょう。

今日は、「ために生きる」という題目で、説教を致しました。以上で説教を終わります。ありがとうございました。